The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	持続としてのイマージュ : ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について
Author(s)	平光, 哲朗
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2434
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【17】

氏　　名	平　光　哲　朗（ひら　みつ　てつ　ろう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２５９８　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**持続としてのイマージュ－ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について－**
論文審査委員	（主査） 教　授　上野　　修 （副査） 教　授　須藤　訓任　　教　授　望月　太郎　　准教授　檜垣　立哉

論　文　内　容　の　要　旨

本論文はアンリ・ベルクソン (Henri Bergson 1859-1941) の主要概念である「持続」を世界の現実的で具体的な生成的時間として読み解こうとするものである。論者はベルクソンの「イマージュ」という独特な概念に注目し、これを外部知覚における精神と物質の具体的な接触様式として理解しようとする。ともすると外的事物を捨象した意識の内的持続のようにとらえられがちな「持続」を、外的諸事物と連帯したわれわれの具体的な経験の時間性として明らかにすること。これが論文全体の課題となっている。

第一章はベルクソンの「イマージュ」概念とその可能性の精査に充てられる。「イマージュ」概念は『物質と記憶』の第一章に「純粋知覚」の想定とともに現われる。物質的事物は意識の外部にではなく、まさに知覚されているところにそのとおりにある。これが知覚イマージュである。知覚からわれわれの側の記憶を剥ぎ取って非人称的な瞬間的知覚に近づけてゆけば、知覚イマージュは物質に一致するであろう。物質的世界とはこうした自存する視点なきイマージュの総体である。本論文は同じ著作の第四章を吟味しながら、かかる想定は記憶による「縮約」の解除として理解されるとする。継起的な諸瞬間がわれわれの記憶によって縮約されるとき、イマージュの総体としての物質的世界から知覚イマージュが、身体というイマージュを中心としたわれわれの可能的行動の投射として浮き上がる。逆にこの縮約を弛緩させてゆけば、知覚は科学が想定するような客観的な物質に立ち返る。主観と客観の違いはこのような縮約の「緊張の程度」の差である可能性が提示される。こうしてベルクソンは物質的世界をひとつの動的連続性においてとらえる「物質の形而上学」を構想するにいたったとされ、初期著作の『意識の直接的所与についての試論』では空間的なものとして意識の持続と対立させられていた物質についても、多様な持続を語る可能性が開かれたとする。

第二章は『物質と記憶』から『創造的進化』へと向かうモメントを、主に前者の記憶論を検討することによって明らかにする。ドゥルーズ、ウォルムスらの諸説を批判的に吟味しつつ、論者は過去の記憶全体がそのつど反復的に収縮して知覚イマージュを現在に供給することでわれわれの再認知覚が

成立するという説をベルクソンのものとして取り出し、収縮した記憶の全体を「性格」として理解する。このような再認知覚が、われわれ人間の行動の非決定論的で自由なあり方を可能にするというのである。それに対し記憶を欠いた物質的事物は、もっぱら非人称的な現在を反復するだけの弛緩した持続しか持たず、機械論的な必然性に従う。これら両極の間には、持続の緊張と弛緩の、程度におけるグラデーションが考えられる。かかる持続の存在論を手にすることでベルクソンは多様な創造的持続を生命進化のうちに読み取る道が開けたとする。

第三章はベルクソンの「砂糖水」の事例を中心に展開される。コップの水に砂糖が溶けるのを私はひたすら待たねばならない。そこには物質の持続と私の持続が連帯する具体的で現実的な絶対的時間がある。『創造的進化』のベルクソンが見いだしているのは、まさにこのような時間、意識の様々な緊張の程度に応じてリズムを異にする多様な持続が連帯する「具体的な全体」としての生成する時間であるとされる。生命進化が示すように、生命と物質という二つの流れの連帯において制限された現在が、予見不可能な仕方で未来へと開かれて持続の現在となっている。それは創造の持続である。生命体はいずれも、それに固有なリズムで物質の持続と連携し、これに非決定性を浸透させる。物質の自己解体的傾向に抵抗しながら、生命は自己創造へと向かう。たとえば生命体の眼という器官は生命の創造要求が物質の抵抗を通過しえた痕跡であって、視覚が行動を宙づりにし、未来の行動の非決定性を担保するのである。砂糖が溶けるのを待ちながら見ている私の知覚もまた、こうした「具体的全体」の中に置き入れてとらえ返されねばならない。論者はそこにベルクソンの、「共感」による「生命」ないし「意識」の直観の、ひとつの到達点を見ている。

論文審査の結果の要旨

ベルクソンは意識における質的多様性としての「持続」を物理的時間の空間的表象に対立させるところから独自の哲学を創始したが、そのままでは物質の時間性を語ることはできない。本論文の功績は従来の研究でいまだ位置づけの定まらない「イマージュ」概念をあえて俎上に載せ、意識と接触する物質自身の持続という困難な問題へのベルクソンの取り組みを主要著作を通して明らかにした点である。われわれの外部知覚がイマージュの総体としての物質の局所的に「縮約」されたイマージュであるとする『物質と記憶』の特異な議論を、本論文は丁寧に再構成することに成功している。また「縮約」による外部知覚が生命体の予見不可能な行動の必須条件であること、そしてこれが多様な生命進化における創造的持続という『創造的進化』の議論に繋がっていくことを明確にしている。とりわけ、われわれの現実的な外部知覚経験にこそ物質と連携した持続の「具体的全体」の直観の領野があるとする指摘は斬新であり、大いに評価できる。ただ鍵となる「縮約」概念の記述に曖昧さが残っているのは否めない。記憶が自らの全過去を縮約する、と言われる一方、記憶が物質の諸瞬間を縮約する、とも言われる。何が何を縮約するのか、またこれら「縮約」が同じ意味でないのなら互いにどのような関係にあるのか、必ずしも論じ尽くされているとは言えない。これと関連して、現実的な経験としての外部知覚に注目するあまり縮約の「主体」がそこに想定されるむきがあるが、もしそうなら他方の一元論的理解と齟齬をきたしはしないかという危惧が残る。経験の「現実性」を一元論的な潜在性との関係でより明確に定義すべきであっただろう。また物質の振動が縮約の緊張が高まるにつれてどうやって感覚的性質に移行するのか、その機制は十分説得的に説明されているとは言えない。ともあれこうした難点はベルクソンの哲学そのものに孕まれている曖昧さに由来するところも大きい。文章はやや冗長な印象があるが、これも議論の対象となる概念を著作順に追跡するためにやむをえなかった面もある。このように本論文はいくつかの問題を残しているとはいえ、ベルクソン解釈における「イマージュ」概念の可能性を積極的に展開してみせた功績は高く評価できる。したがって、本論文を博士（文学）の学位に相応しいものと認定する。